



〈H31132061〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～7ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定の欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。
 - (4) 解答用紙は折り線のところで山折りにしてから解答すること。
 - (5) 字数指定のある問いに答える場合は、句読点などの記号も字数に含めるものとする。
 - (6) 字はすべて丁寧に書くこと。
- 5 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。
- 6 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 7 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 8 この問題冊子は持ち帰ること。

大学の知が「役に立つ」のは、必ずしも国家や産業に対してだけとは限りません。神に対して役に立つこと、人に對して役に立つこと、そして地球社会の未来に對して役に立つこと——。大学の知が向けられるべき宛先にはいくつものレベルの違いがあり、その時々々の政権や国家権力、近代的市民社会といった臨界を超えています。

そしてこの多層性は、時間的なスパンの違いも含んでいます。文系の知にとつて、三年、五年ですぐに役に立つことは難しいかもしれません。しかし、三〇年、五〇年の中長期的スパンでならば、工学系よりも人文社会系の知のほうが役に立つ可能性が大です。ですから、「人文社会系の知は役に立たないけれども大切」という議論ではなく、「人文社会系は長期的にとつても役に立つから価値がある」という議論が必要なのです。

そのためには、「役に立つ」とはどういうことを深く考えなければなりません。概して、例えば、「役に立つ」ことには二つの次元があります。一つ目は、目的がすでに設定されていて、その目的を実現するために最も優れた方法を見つけていく目的遂行型です。これは、どちらかというところと理系的な知で、文系は苦手です。たとえば、東京と大阪を歩き来するため、どのような技術を組み合わせれば最も早く行けるのかを考え、開発されたのが新幹線でした。また最近では、情報工学で、より効率的なビッグデータの処理や言語検索のシステムが開発されています。いずれも目的は所与で、その目的の達成に「役に立つ」成果を挙げます。文系の知にこうした目に見える成果の達成は難しいでしょう。

しかし、「役に立つ」ことには、実はもう一つの次元があります。たとえば本人はどうしていいかわからないでいるのだけれども、友人や教師の言ってくれた一言によってインスピレーションが生まれ、厄介だと思っていた問題が一挙に解決に向かうようなときがあります。この場合、何が目的か最初はわかっていないのですが、その友人や教師の一言が、向かうべき方向、いわば目的や価値の軸を発見させてくれるのです。このようにして、「役に立つ」ための価値や目的自体を創造することを価値創造型と呼んでおきたいと思います。これは、役に立つと社会が考える価値軸そのものを再考したり、新たに創造したりする実践です。文系が「役に立つ」のは、多くの場合、この後者の意味においてです。「目的遂行型の有用性」「役に立つこと」は、与えられた目的や価値がすでに確立されていて、その達成手段を考えるには有効ですが、そのシステムを内側から変えていくことができません。したがって目的や価値軸そのものが変化したとき、一挙に役に立たなくなりえます。

つまり、目的遂行型ないしは手段的有用性としての「役に立つ」は、与えられた目的に對してしか役に立つことができませぬ。もし目的や価値の軸そのものが変わってしまったならば、「役に立つ」と思っ出出した解も、もはや価値がないということになります。そして実際、こうしたことは、長い時間のなかでは必ず起こることなのです。

価値の軸は、決して不変ではありません。数十年単位で歴史を見れば、当然、価値の尺度が変化してきたのがわかります。たとえば、一九〇〇年代と現在では、価値軸がすっかり違います。東京オリンピックが催されたころは、より速く、より高く、より強くといった「**B**」上がりの価値軸が当たり前でしたから、その軸にあった「役に立つ」ところが求められていました。新幹線も首都高速道路も、そのような価値軸からすれば追い求めるべき「未来」でした。超高層ビルからワンガン開発まで、成長期の東京はそうした価値を追い求め続けました。ところが二〇〇〇年代以降、私たちは、もう少し違う価値観を持ち始めています。末長く使えりとか、リサイクルできるとか、ゆっくり、ユカイに、時間をかけて役に立つことが見直されています。価値の軸が変わってきたのです。

よく言われるのは、SonyのウォークマンとAppleのiPad/iPhoneの違いです。SonyはなぜAppleになれなかったのかを考えたとき、Sonyは既存の価値の軸を純化していった。つまりウォークマンはステレオの聴くという機能に特化して、それをモバイル化した。その意味では非常に革新的だったのですが、ウォークマンはあくまでもステレオだったわけです。ところがiPad/iPhoneは、パソコン、そして携帯電話という概念自体を変えてしまった。コミュニケーションがどういふものであつて、そのなかでどのような技術が必要かという考え方をしているから、テクノロジーの概念そのものを変えてしまった。これが価値の軸が変化しているということです。五年や一〇年では変わらないかもしれませんが、より長いスパンで見れば、必ず価値の軸は転換をしていくわけです。

Sonyに限らず、与えられた価値軸の枠内でウォークマンのような優れた製品を作るのは、日本の、特に工学系の強みでしょう。しかしiPad/iPhoneの例が示すように、価値の転換をするというのは概念の枠組みそのものを変えてしまうことで、与えられたフレームのなかで優れたものを作るのとは別次元の話です。大きな歴史の流れのなかで価値の軸そのものを転換せしめよう力、またそれを大胆に予見する力が弱いのは日本社会の特徴であり、それが、日本が今も「後追い」をヨギなくされる主な原因だと私は思います。

すべてがそうというわけではありませんが、概して理系の学問は、与えられた目的に對して最も「役に立つ」ものを作る、目的遂行型の知であることが多いと思います。そして、そのような手段的有用性においては、文系よりも理系が優れていることが多いのも事実です。しかし、もう一つの価値創造的に「役に立つ」という点ではどうでしょうか。

目的遂行型の知は、短期的に答えを出すことを求められます。しかし、価値創造的に「役に立つ」ためには、長期的

に変化する多元的な価値の尺度を視野に入れる力が必要なのです。ここにおいて文系の知は、短くても二〇年、三〇年、五〇年、場合によっては一〇〇年、一〇〇〇年という、総体的に長い時間的スパンのなかで対象を見極めようとしてきました。これこそが文系の知の最大の特徴だと言えますが、だからこそ、文系の学問には長い時間のなかで価値創造的に「役に立つ」ものを生み出す可能性があるのです。

また、多元的な価値の尺度があるなかで、その時その時で最適の価値軸に転換していくためには、それぞれの価値軸に対して距離を保ち、批判していくことが必要です。そうでなければ、一つの価値軸にのみめり込み、それが新たなものに変わったときにまったく対応できないということになるでしょう。たとえば過去の日本が経験したように、「鬼畜米英」となれば一斉に「鬼畜米英」に、「高度成長」と言えば皆が「高度成長」に向かって走っていくというようなことでは、絶対に新しい価値は生まれません。それどころか、そうやって皆が追求していた目標が時代に合わなくなった際、新たな価値を発見することもできず、どこに向かつて舵を切ったらいいか、再び皆でわからなくなってしまうのです。

価値の尺度が劇的に変化する現代、前提としていたはずの目的が、一瞬でひっくり返ってしまうことは珍しくありません。そうしたなかで、いかに新たな価値の軸をつくり出していくことができるか。あるいは新しい価値が生まれてきたとき、どう評価していくのか。それを考えるには、目的遂行的な知だけでは駄目です。価値の軸を多元的に捉える視座を持った知でないといけない。そしてこれが、主として文系の知なのだと思います。

なぜならば、新しい価値の軸を生んでいくためには、現存の価値の軸、つまり皆が自明だと思っているものを疑い、反省し、批判を行い、違う価値の軸の可能性を見つめる必要があるからです。経済成長や新成長戦略といった自明化している目的と価値を疑い、そういった自明性から飛び出す視点がなければ、新しい創造性は出てきません。ここには文系的な知が絶対に必要ですから、理系的な知は役に立ち、文系的なそれは役に立たないけれども価値があるという議論は間違っていると、私は思います。主に理系的な知は短く役に立つことが多く、文系的な知はむしろ長く役に立つことが多いのです。

(吉見俊哉『文系学部廃止』の衝撃)より)

問一 傍線部 a～c のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部 1 のように言えるのはなぜか。次の中から適切でないもの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 人文科学系の知は、時代の変化を踏まえて新たな価値や目的を創り出すときに役に立つから。
- イ 社会において支配的な価値軸は、社会が成長期から安定期に向かう中で必ず変化していくから。
- ウ 社会の中に新しい価値観が生まれてきたとき、人文科学系の知はそれを適切に評価できるから。
- エ 数十年単位で歴史を見れば、概念の枠組みそのものが転換されるという事態は必ず生じるから。
- オ 世の中で当たり前だとされていることを、人文科学系の知は批判的に捉えることができるから。

問三 傍線部 2 「目的遂行型」の知の説明として適切でないもの一つを選び、記号で答えよ。

- ア 短期的に目に見える成果を出すことに力を傾注する。
- イ 対象の所与の概念に基づいてその機能を進化させる。
- ウ 特定の課題を解決するために最も有効な手段を考案する。
- エ 未来において最適となる価値軸を予想して技術を生み出す。
- オ 世の中で了解されている共通の目的を前提にして解を導く。

問四 傍線部 3 「そのシステムを内側から変えていく」ために、われわれが持たなければならぬものは何だと述べられているか。最も適切な部分を本文中から三十二字で採り、そのはじめの五字を答えよ。

問五 空欄 A に入る数字を漢数字で答えよ。

問六 空欄 B に入る二字の言葉を漢字で答えよ。

問七 傍線部 4 「既存の価値の軸を純化して」いくことと同じ内容を否定的に捉えたと、どのように言い表せるか。次のように答えるとき、その空欄に入る言葉を、本文中の言葉を用いて、十三字で答えよ。

くくく。

問八 傍線部5のようなことはなぜ生じたのか。その説明として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 日本では価値創造的な実践が十分に行われていなかったから。
- イ 日本では社会の価値軸を大きく転換する大胆さが欠けていたから。
- ウ 日本では歴史の流れとは異なる可能性を予見する力が弱かったから。
- エ 日本では長いスパンの中で対象を見極めることが不十分だったから。
- オ 日本では価値軸を複数の視座から捉えることが行われなかったから。

問九 「理系的な知」をA、「文系的な知」をBとして、それぞれに関わりの深い性質を挙げるとき、適切でないものを

次の中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

- A ア 革新的 イ 技術的 ウ 機能的 エ 工学的
- B ア 創造的 イ 批判的 ウ 概念的 エ 多元的

問十 次の中で本文の内容と合致しないものを一つ選び、記号で答えよ。

- A Sonyは、与えられた価値軸の下で限定された目的を達成するという工学系の知において優れていた。
- イ 友人や教師の一言で問題が一気に解決に向かうのは、新しい目的や価値観が発見できたからである。
- ウ 理系的な知は、国家、産業、その時々々の政権が「役に立つ」と見なすような可視的な成果を生み出せる。
- エ Appleは、常識にとらわれずに新しいコミュニケーションの形を考え、そこから新たな技術を開発した。
- オ 文系的な知は、価値や目的を創造できるという手段的有用性を備えており、その意味で役に立つと言える。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私がこの時の探検で感じたことは、表現は常に純粋な行為を侵食しようとするという、行為と表現の間に横たわる関係性だったと思う。書くことでも映像をとることも何でもいいのだが、結果として表現に置き換えることを前提に何かの行為をする場合、その行為の純粋性を保つことは想像以上に難しい。

とりわけ、事実を提示することを前提としたノンフィクションの作品づくりにおいて、行為と表現は常に現場で激しくせめぎあっている。ノンフィクションをフィクションではなくノンフィクションとして成立させる分岐点について、恐らく多くの人は、文章を書く時に飛躍を交えずに事実だけで物語を書けるかどうかという部分にあると考えるだろう。もちろんそこにも分岐点はあるが、実はその手前にももう一つあって、そっちの方が問題としては複雑だ。ノンフィクションを成立させる場合の本当の難しさは、実は文章を書く時にノンフィクション性を成立させることにあるのではなく、むしろ行為をしている時にノンフィクション性を成立させることにあるのだ。

例えば、文章を書くことを前提に旅をする場合、その旅は文章化しようという意図の影響を受けるため、旅という行為そのものがフィクション、つまり作り物になってしまいう可能性がある。ライターという表現者としての立場で考えると、行為の最中に発生する面白い場面や出来事はどれもこれも作品のためのネタになる。例えば旅の途中で知り合った人に騙されて金品を巻き上げられたとする。こうしたトラブルは旅人としての立場で考えると痛み以外の何物でもないが、ライターとしての立場で考えると作品を盛り上げるためのかけがえのない要素となる。もちろんそれはそれで問題ない。出来事はドラマを盛り上げるために欠かせない要素であり、出来事こそが物語を推進させる力になるからだ。

問題なのは、そうではなく、この時の旅人であるライターの態度の有り様なのだ。そのトラブルが、ライターが予期しないかたちで向こうから勝手に発生したのなら何も問題はない。しかし、もしライターがトラブル発生の前兆を敏感に嗅ぎ取り、何か書けることが起きるかもしれないと期待し、結果的にそれを呼び込むかたちで行動をとった場合、その瞬間に旅は純粋な意味での旅ではなくなってしまう。旅先で知り合った人がいかにも怪しげで、下手をすると金品でも巻き上げてきそうな人相であるにもかかわらず、でもそうなら本を書くいいネタになるかも……などという思惑^a絡みで友達になり、実際に金品を巻き上げられた場合、私には、そのトラブルは旅が演技化した結果起きたことになると言えるような気がするのだ。そして旅が演技化してしまえば、表現の前提となる行為そのものがフィクションになったことになるので、それをいくら事実として提示しても、出来上がった文章作品をノンフィクションと呼べるのか、よく分からないのである。

ツアンポー峡谷の探検の最後の局面について考えてみよう。結果的に私は生身の人間として生き残ることを最優先に考え、安全な第三の生き残り策をとった。そのため人間の自然な行為として旅を終えることになり、それをノンフィクション作品として書きあげることができた。

しかし、仮に私がその第三の生き残り策に気がついていながら、表現の究極性を求めるあまり、一か八かの解決策のほうを選んで、そして生き残ったとしよう。その場合、その行為は演技とは言えないだろうか。よりスリリングな表現を求めた結果、行為が自然な振る舞いから**b** イツダツし飛躍してしまったと言えないだろうか。さらにそれが文章作品になった場合のことを考えてみよう。もし私が第三の安全な生き残り策に気がついておきながら、気づいたことには作品の中でまったく触れず、やむなく一か八かの解決策を選んで生き残ったように装って書いた場合、それをノンフィクションと呼ぶのは妥当なのだろうか。作品の中で事実しか書かれていないとしても、そこに書かれた事実は本当の意味での「事実性」を具有しているのだろうか。

もちろん作品化する過程で文章上の編集作業を行うことは避けては通れない。不必要な事実を切り落とすことでテーマを浮き彫りにさせるのは作者の力量でもある。だからそれをノンフィクションと呼ぶことも可能だろう。しかしこの局面は作品のクライマックスであり、本のテーマが凝縮された場面でもあった。そのような重要なシーンで、実は行為そのものが現場で編集されていたことを作品の中で示さないでおくことは、ノンフィクションの手法として許されることなのだろうか。私にはよく分からないのだ。

⁴ 行為がフィクション化する傾向は、このような **A** な場面だけでなく、行為のほとんどあらゆる局面で発生する。例えば旅の途中でライターが村人と何か言葉を交わす機会があったとする。相手の話す内容に深みや面白みを感じた時、ライターは旅人としてより、むしろ表現者としてその話を作品の中に取り込みたいと考えるだろう。だがそう考えた瞬間に、彼の会話はその意図の影響を少なからず受け、次に自分が口に出す言葉（＝行為）自体が書くこと（＝表現）を前提としたものになり、相手の話をもっと深く聞き出そうとか面白くまとめようとかいう態度に変わってしまう。そして村人との会話がより「書けそうな」面白いものとなった瞬間に、その旅人は心の中で、いい会話ができたことを喜ぶ。つまり表現者としていい仕事ができたと喜ぶわけだ。

しかしこうした表現者としての満足感は、作品化することが前提にあつて初めて生じる感情なので、純粋な旅人なら感じることはないものだ。実際にこの旅が本になって、この村人との会話が収録されたとしても、表現者として感じたこの満足感が文章化されることは決してない。なぜならば、作品の中の主人公は旅人としての「私」であり、表現者としての「私」は裏方に過ぎないからだ。作品の中の「私」は、あくまで表現者ではなく行為者として、さりげない旅人として自然に振る舞わなければならないのである。

作家の沢木耕太郎は山口瞳のことを論じた文章の中で、旅におけるこうした行為と表現の関係について、次のように書いている。

ひとたび「物書き」になってしまった以上、さりげない旅などできはししないのだ。「物書き」は「物書き」としての旅以外のものはできない。有名無名、顔が知られているとかいないとかの問題ではない。（中略）「物書き」につきまとう切実な問題だ。また行為が具体的に變形しない場合でも、**C** は **D** を侵食しようとする態度を決して崩そうとしない。ツアンポー峡谷のケワしい谷の中をうごめいている最中、私は常に自分の行動やまわりの環境を状況中継するかのよう把握しようとしていた。自分の足元は濡れた石灰岩の傾斜のきつい岩壁で、その上には高い湿度のせいで腐りかけた細い木が生えており、今、自分はそれを折れないようにそとつつかんだ……といった具合である。私はこうした状況中継を決して意図的に行っていたわけではない。表現を前提に行為をしているものだから、常時、無意識のうちに行為を文章化して、表現形態に置き換えようとしていたのだ。

もちろん状況中継をしていたからといって、この探検の事実性が損なわれたわけではないし、行為がフィクション化してしまつたわけでもない。だから状況中継をしながら探検して、それを文章でドキュメントしても、純然たるノンフィクション作品として成立する。だがこうした状況中継にみられる、常に行為をジリジリと表現形態に置き換えようとする表現者としての態度は、よほど気をつけてかからないと、行為を面白く見せるためのヤラセを引き起こす可能性がある。よりスリリングな物語を提示したいという表現者側の論理は、純粋に行為に専念したいという行為者側の立場を常に飲み込もうとしているのだ。

語注

*ツアンポー峡谷 チベットの奥地にある世界最大の峡谷地帯。

問一 傍線部 a、b、c のカタカナを漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで答えよ。

問二 傍線部 1「行為をしている時にノンフィクション性を成立させること」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 旅を文章化する目的があっても、旅では自分の安全が優先されるということ。

イ 旅を文章化する意図に基づいて、旅をしながら頭の中で文章を考えるということ。

ウ 旅を文章化する予定があっても、旅を通じて旅人としての自然な言動を貫くこと。

エ 旅を文章化することを念頭に置いて、旅の途中で面白そうな出来事を収集すること。

オ 旅を文章化する目的があれば、旅での行動は自然と優れた作品を生み出すということ。

問三 傍線部 2「旅が演技化した」と同じ内容をより具体的に表現している部分を、本文中から三十一字で探し、そのはじめの五字を答えよ。

問四 傍線部 3 について、「表現の究極性を求めるあまり、一か八かの解決策のほうを選ん」だことと同じ内容をより簡潔に表現している部分を本文中から十七字で探し、そのはじめの五字を答えよ。

問五 傍線部 4「行為がフィクション化する傾向」とあるが、それがもたらす最悪の結果として想定されているものは何か。本文中から一語を抜き出して答えよ。

問六 空欄 A に当てはまる語を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 具体的 イ 空想的 ウ 例外的 エ 類型的 オ 象徴的

問七 傍線部 5「物書き」が紀行文においてさりげなさを装うことは欺瞞にすぎない」とあるが、なぜそのように言えるのか。その理由を次のように答えよ。空欄に当てはまる五字の言葉を本文中から抜き出して答えよ。

紀行文の中の「私」がまるで旅自体を目的とする [] であるかのようにふるまうことによって読者をおどまわっているから。

問八 空欄 B には「ある局面に向かって時が次第に過ぎていくさま」という意味になる三字の言葉が入る。その言葉を「 [] 」という形で答えよ。この二つの空欄に共通して入る漢字一字を答えよ。

問九 空欄 C、D に入る一語を本文中からそれぞれ抜き出して答えよ。

問十 次の中で本文の内容と合致するもの一つを選び、記号で答えよ。

ア ノンフィクションでは、旅の途中で予期しない形で起きた出来事は、作品のフィクション性を高める要素となる。

イ ノンフィクションでは、旅の体験を作品化する場合に、必要となる事実だけを取捨選択して編集作業を行ってよい。

ウ ノンフィクションでは、旅の途中で予想外の出来事呼び込むことは、作品を盛り上げるために不可欠なものである。

エ ノンフィクションでは、旅の途中で出会った人から面白い話を聞いたという作者の満足感は、作品を通じて表現される。

オ ノンフィクションでは、旅に専念したいという欲求は、面白い作品を創作したいという欲求と同程度に強いものである。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

横川の恵心僧都えしんそうどう*の妹、安養の尼のもとに強盗入りにけり。ものどもみな取りて出でにければ、尼上は紙ぶすまといふものばかりを引き着てゐられたりけるに、姉なる尼のもとに、小尼君とてありけるが、走りまゐりて見ければ、小袖をひとつ取り落したりけるを取りて、「これを盗人取り落としてはべりけり。奉れ。」とて持ちて来たりければ、尼上の言はれけるは、「これも取りて後はわが物とこそ思ひつらめ。ぬしの心ゆかざらんものをばいかを着ける。盗人はいまだ遠くへはよも行かじ。とくとく持ちておはしまして、取らさせたまへ。」とありければ、門のかたへ走り出でて、「やや。」と呼び返して、「これを落とされにけり。確かに奉らむ。」と言ひければ、盗人ども立ちどまりて、しばし案じける気色にて、「あしく参りにけり。」とて、とりたりける物どもをも、さながら返し置きて帰りにけりとなむ。

〔古今著聞集〕より

語注

*横川 比叡山延暦寺のうち、北方の一带を指す。

*恵心僧都 源信（九四二—一〇二七）。『往生要集』の著者として知られる。

*紙ぶすま 紙で薬を包んで作った布団。

問一 二重傍線部 a、d の主語として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えよ。（同じ記号を繰り返して使つてよい。）

- ア 恵心僧都 イ 安養の尼 ウ 盗人 エ 小尼君

問二 敬語動詞「奉る」には複数の意味がある。本文中の波線部 A・B はどの意味で用いられているか。次の中から適切なものをそれぞれ選び、記号で答えよ。（同じ記号を繰り返して使つてよい。）

- ア 「着る」の尊敬語、「お召しになる」の意。
 イ 「与える」の古語「与ふ」の謙讓語、「さしあげる」の意。
 ウ 「乗る」の尊敬語、「お乗りになる」の意。
 エ 謙讓の意を表す補助動詞、「～してさしあげる」の意。

問三 傍線部 1 における「尼上」の発言の意図として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 盗人も気に入らなかつたような小袖を自分が着るのは癪に障る。
 イ 盗人が満足するまで着た後でなければ、自分はこの小袖を着るわけにはいかない。
 ウ 盗人が気に入らなかつたからこの小袖を置いて行ったのかどうかは聞くすべがない。
 エ 盗人が自分に与える気になつていない小袖を、盗人の許可を得ずに着ることは、元々自分の小袖とはいえ、盗みに値する。

オ この小袖は所有者の自分が元々気に入らなかつたものであるから、他に着るものがないとはいえ、今さら着る気になれない。

問四 傍線部 2 の現代語訳として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 決して行かないだろう。
 イ まさか行かないはずがない。
 ウ どうしても行くはずあるまい。
 エ どうして行かないわけがあるものか。

問五 傍線部 3 で表現された「盗人ども」の心情として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 不要なものを無理に押し付けられたことに対する迷惑。
 イ 盗みに入った相手から盗品を返されたことに対する困惑。
 ウ 親切にも落としたものを返してくれたことに対する感謝。
 エ 盗んだものを落とした失態を指摘されたことに対する不快。
 オ 盗人だと知られ、役人に捕まえられるかもしれないという心配。

